旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

若松　秀俊

◇27◇

厳格だったプラーゲ先生

ドイツ語の授業（上）

カルシュの着任前後のドイツ語教育について、当時の生徒が語っている。教える先生の人柄によって、その印象はずいぶん違うようだ。興味深い証言である。

カルシュの前任のプラーゲに関しては、厳しい先生という言葉が一様に返ってきた。彼は西洋人としては小柄で、ドイツ語は正確に耳で聞き、そのまま発音しろと言っていた。熱心だったが教え方が厳格で、質問への答えをいちいち閻（えん）魔帳に記入していた。

そんな風だったので生徒の反発を受け、学級全体がサボタージュして楽山に逃げたことがあった。後で、主任の小林教授が心配そうに教室へ来たことを覚えている。松江高校四期文乙の米田勇次郎は、そのような記録を残している。

プラーゲは「自分はプラーゲであるが、本名はプラギウス（苦悩）というのです。よく当たっているでしょう」と皮肉って言ったことがあったという。後年『プラーゲ旋風』と称して音楽の版権について騒いでいたが、これは米田と同期生の柴田午郎である。大正の末ごろ、どうした風の吹き回しか、ドイツ語という思いもしない外国語を主とする文科に入学許可になった。彼は、中学の時に初めて英語を習った時のことを思い出して、やや憂鬱（うつ）であった。教師はプラーゲで、生徒は毎日戦々恐々であった。

ところが、それから一年半あまり経ってその先生が突然帰国した。

その代わりが笑顔をたえた大男のカルシュであった。教え方も優しく、ほっとした記憶があるという。今日思い出してみると、この二人の先生は性格も教え方も全く正反対なのである。一方は拳骨をふりあげるほどの怖い先生。他方はいつもにこやかで、甘えたいほどのやさしい大男の先生。

しかし柴田が今でも思わず口をついて舌に乗せるドイツ語は、あのプラーゲに教えられた詩である。ある時、先生が暗唱してこいといった「インメン湖」という詩の一編である。でも、柴田は覚えて来なかった。すると怖い顔で「シバタハコノゴロ、ベンキョウシナイデス」とさんざん叱（しか）られた。

近年は当時に比べると、その教え方もずい分変わった。少しきつく生徒をしかるとマスコミから非難されることもある。しかし八十年ほど前に、拳骨をはらんばかりにして教えられたドイツ語が、今でもすらすらと口から出るのに、やさしく丁寧にカルシュから教わったことはほとんど忘れてしまっている。柴田は自分の経験と照らし合わせ、〝拳骨先生〟の効果を価値あるものと信じて疑わないようだ。

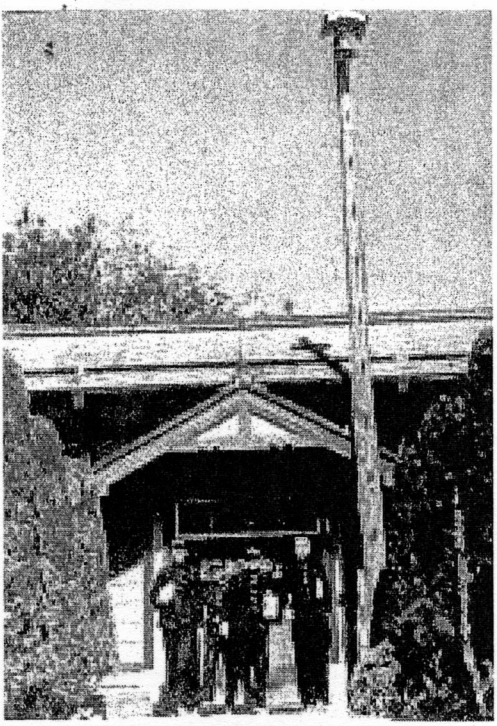
五期理乙の鈴木繁徳によれば、当時、外国人教師から直接外国語を習うのは初めてのことで、うれしいことでもあった。ところがプラーゲは毎日が厳しい。ワルどもがいたずらを思いつき、チョークを一本残らず隠してしまった。先生が教室に来て、ちょっと探していたが、それと気付いて開きなおった。「…日本の将来を背負って立たねばならない君たち…」に始まって「将来が案じられて仕方がない…」であった。一人立ち二人立ちして、スゴスゴと自白した。純情な小学生にそっくりだった。

チョークが戻り、授業は再開。当時、先生によっては、毎時間、真新しい長いチョークで大きな字を書き、折れるとまた新しい分を出す、といった具合であった。

それにひきかえプラーゲは、小さなチョークのヒトコゲを箱の底から探し出して、三本指の先につまんで字を書く人であった。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝



自習寮（旧制松江高校学寮）